

季刊

# 博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM  
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

# 79

冬の収蔵資料品展

江戸時代の  
地図・絵図

## 福島県立博物館



会津領絵図〔部分〕 福島県立博物館蔵

冬の収蔵資料品展は、江戸時代の地図・絵図を御覧いただきます。当館には、様々な種類の地図・絵図が所蔵されていますが、とくに会津のようすを描いたものが多いのが特色です。

展示室では、現在の会津の風景を思い浮かべながら、それらの地図・絵図を御覧ください。江戸時代の名残を今なお残しているところ、大きく変化したり失われてしまったところなどに気づかされることでしょう。

また新しい展示の試みとして、大型の絵図や傷みの激しい絵図については、実物ではなく、複製や画像データとしてお見せすることや、皆さんの住んでいる市町村を描いた地図・絵図を収蔵品の中から検索できるようなシステムも準備しようと考えています。ぜひ展示室をのぞいてみてください。

#### ○若松城や城下町の絵図

若松の城下町のようなすを描いた屏風絵は有名です。現在は観光名所となっている鶴ヶ城の水をたたえた堀や土塁・石垣の形を、絵図の中にたどることが出来ます。また市街地の中に残る郭門や交差点の道の食い違いが、江戸時代の城下町の名残であることがわかります。

#### ○漆木の絵図

会津の特産品として有名な漆器とろうそく。会期中には、降り積もった雪を明るく照らす絵ろうそく祭りも行われます。この地域の特産品としての位置づけは、江戸時代に確立しますが、それを象徴するかのようには、原料となる漆の木の種類や本数を村ごとに記録した絵図が作成されています。会津藩が、漆木の栽培を奨励し、また貢納物として厳しく管理していたことがわかります。

#### ○村の絵図

村の山林や耕地のようすを描いた絵図の大部分は、現代でいえば行政文書の一部になります。絵図作成のマニュアルともいえる見本（ひな形）もありました。村絵図は、災害にともなう年貢の免除申請や、境界争いの解決のため、また現地調査に赴いた役人の案内などの目的で作成されました。ごく簡単に描かれたものであっても、込められた想い・願いは切実な場合が多かったのです。

## 冬の収蔵資料品展

# 江戸時代の地図・絵図

— 会津領二十三万石を歩く —

●会期 平成18年1月21日(土)―3月26日(日)



若松城下絵図屏風〔部分〕 甲賀町口郭門付近

○領域絵図

会津藩領や南山御蔵入領の領域と村々を描いた絵図は、何種類か知られていますが。今回展示するものの中には、作成・景観の年代が特定できないものもありますが、書かれている事物や語句を調べて、絵図の年代を推理してみました。絵図の謎解きにも、どうぞおつき合ってください。

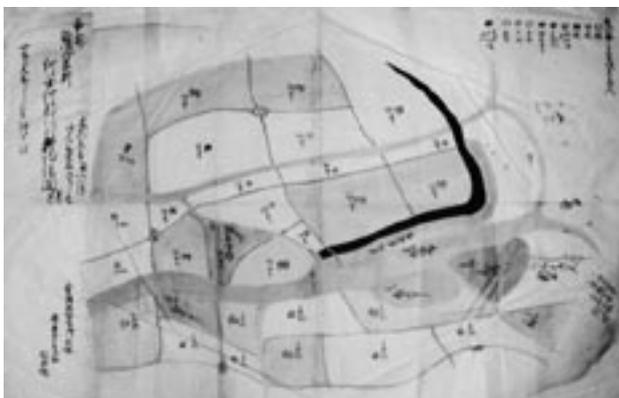
○日本地図・道中絵図・名所絵図

地図と旅とは、切ってもきれない関係にあります。現代でも使われる折り畳み式の地図は、江戸時代から使われています。携帯に便利な工夫のひとつといえるでしょう。道中の宿場を順番に描いた絵図や、寺社や温泉のようすを印刷した名所絵図は、当時の庶民の旅情をかきたてたことでしょう。

会津領二十三万石。いろいろな町や村を訪れ、広大な山河や田畑を眺めながら歩き回る感覚を味わってみませんか。江戸時代の会津に一步步近づいてみようとする時に、地図・絵図は、きつとよい道案内役になってくれることでしょう。



本寺村漆木絵図〔部分〕  
村内の漆の木の本数が書き込まれている



村絵図ひな形〔部分〕  
幕末の南山御蔵入領の村絵図のひな形



道中絵図〔部分〕 若松から江戸までの道中絵図に描かれた湖南

会期中の関連行事

○展示解説会

日時 一月二二日(土)  
午後二時半～

■収蔵資料品展《江戸時代の地図・絵図》は、平成一八年一月二二日(土)から三月二六日(日)まで開催しています。なお、資料保護のため、会期中に一部資料の展示替えを行います。常設展観覧料で御覧いただけます。

※写真掲載資料は、すべて福島県立博物館蔵

## 企画展

# 「婚礼—ニッポン ブライダル考」

## 関連事業

一〇月一六日(日)一三時半  
記念公演

「婚礼の謡」

—博物館で模擬婚礼—

会場 企画展示室

演者 会津能楽会の皆さん

秋の企画展「婚礼—ニッポンブライダル考」では、展示室の最後のコーナーで、かつて自宅で行っていた婚礼の床飾りや宴の様子を紹介しました。松竹梅や鶴亀の飾りを載せた飾り台や婚礼に用いられた掛軸、朱塗の漆器や復元した婚礼料理などを展示していました。漆器は展示室に組み立てた和室に並べて、宴の雰囲気再現してみました。皆さんご覧いただけただけでしょうか？

展示期間のちょうど中日にあたった一〇月一六日。漆器と料理の一部を片付け、和室を舞台に企画展の記念公演を行いました。博物館での模擬婚礼です。自宅で行っていた婚礼の主要な部分、花婿と花嫁が夫婦になることを約束する「三々九度の

盃」、そして、花嫁と花婿の両親、花婿と花嫁の親戚が盃を交わし親子の契りを結ぶ儀式を、博物館で行ってみたのです。婚礼のスタイルは地域や階層によって千差万別ですが、今回は会津地方で行われていた婚礼の一例を参考にしました。

出演は、会場にいた来館者の皆さんにお願いしました。主役である花婿花嫁に扮して下さったのは、只見町の梁取正典さんと菅家由果さんです。梁取さんには紋付の袴を、菅家さんには白の打掛を羽織ってもらいました。爽やかでとても素敵な花婿花嫁姿でした。花婿の両親役は、昭和村からお越し下さっていた東原源伯さんとそのお姉さんの本名ヨネ子さんが引き受けて下



さいました。花嫁の親戚一同を代表する見参役は、会津能楽会員でもある玉川おくにさん。盃にお酒を注ぐ男の子の雄蝶役は会津若松市の川延就郁君、女の子の雌蝶役は会津若松市の猪股みなみちゃん、長時間の正座に耐えつつがんばってくれました。

盃を交わす儀式は、お祝いの謡を合図に進められます。例えば「高砂」という能の演目の中で謡われる「四海波静かにて」で始まる謡が終わったら花婿は盃の酒を飲み干すといった具合です。謡は数ある能の演目の中のでたい内容のもの、その中でも祝賀に満ちた歌詞の部分が選ばれています。進行に重要な役割を果たす謡を謡って下さったのは、会津能楽会の丑米義弘さん、山田和彦さん、折笠成美さんでした。

夫婦の盃を花婿花嫁のどちらから飲むのかは、諸説ありますが、今回は花婿が最初に飲む方法で行いました。男性の花婿にお酒を注ぐのは、女の子の雌蝶の役目です。盃にお酒が満たされ、花婿が自分の前に置くと、能楽会の皆さんが重厚で趣のある歌声で謡います。「四海波」が終わると、花婿は三回に

次は花嫁の番です。お酒を注ぐのは雄蝶です。花嫁がお酒の入った盃を前におくと、「高砂」から「所は高砂の」と始まる謡が謡われ、花嫁も三回にわけてお酒を飲みました。

もう一度花婿にお酒が注がれます。「春栄」という能から「なほ喜びの盃の」と始まる謡が謡われ、花婿がお酒を飲み干すと、夫婦の盃事は終了です。お互いにお酒を飲み交わすことで、花婿と花嫁は夫婦になる誓いを交わしたのです。

続いて、花嫁と花婿の両親の親子の盃。花婿の父、花婿の母、花嫁の順でお酒を飲み、義理の親子となったことを誓います。途中で謡われたのは、「鶴亀」から「庭の砂は金銀の」の部分、「養老」から「長生の家にこそ」の部分、「春栄」から「猶々廻る盃の」の部分でした。最後は花婿と花嫁親戚代表の見参の盃事です。見参は花婿から手渡された盃で、お酒を飲みました。謡われたのは「高砂」から「げに様々の舞姫の」の



部分でした。

会津能楽会の皆さんの、素晴らしい歌声による祝い歌に祝福されながら行った博物館の模擬婚礼。和室を囲んだ一〇〇人余りの来場者も見守って下さいました。今ではほとんど行われなくなった自宅で行っていた婚礼の再現は、若い方々には新鮮に、年配の方々には懐かしく映ったようです。

(美術担当 小林めぐみ)

## 軸木墨書にみる

## 「十二天図」の修復過程

阿部 綾子 歴史担当

本年度夏の収蔵資料品展「中世の恵日寺」に出品した資料の中に、十二天図がある。十二天図は、江戸時代の恵日寺の什物を記した書上の中に記載が見えるものの、長らく所在が分からなかった。ところが昭和五九年になつて所在が判明し、一二幅をまとめて当館で購入した。この十二天図は室町時代の作品と考えられ、状態が良くなかったため、昭和六一年より順次修理を行い、現在は全幅の修理を終えている。

十二天とは方位や日月天地を守護する神で、十二天を描いた十二天図は、密教の儀式で用いられた。当館所蔵の十二天図も、恵日寺に伝えられたことが明白であることから、ある時期の恵日寺の信仰のありようを示す貴重な資料といえることができる。

ところで、十二天図購入に際し、当館が恵日寺旧蔵のものだと判断した最大の理由は、十二天図に付随していた軸木の墨書であった。この軸木は、当館購入直前の修理により取り外されたと考えられ（この修理の正確な時期は不明であるが、近年の修理と思われる）、二本そろっており、そのうち七本に墨書がある。墨書はすべて、一七〜一九世紀に行われた、大寺（恵日寺）什物十二天図の修復記録であった。そこで、軸木墨書から、十二天図修復の実像をひもといてみたい。

墨書のある軸木七本には、そのすべてに年紀がある。その内訳は、慶長六年（一六〇二）のものが一本（第一期）、延宝二年（一六七五）が二本（第二期）、正徳五年（一七一五）が一本と翌正徳六年が二本（第三期）、文政九年（一八二六）が一本（第四期）である。このことか

ら十二天図は、少なくとも江戸時代に四回の修復が加えられ、その間隔が約四〇〜一〇〇年であったことが判明する。墨書には「大寺住物十二天奉表具仕」「大寺住物十二天表具仕立」「大寺村恵日寺什物十二天奉表具仕」などであるが、修復の際に、全幅すべてを修理しているのか、それとも数幅ずつ行っているのかは断定ができない。

次に、それぞれの時期の修復について見ていこう。

第一期の修復は、「大寺玄弘法印」（恵日寺住持玄弘）の発願により行われた。表具師は「山城□□四丁住人中□□<sup>（室元子）</sup>」である。岡村常玖はこの時五七歳で、「会津殿マネキ留<sup>ル</sup>住」（会津殿に招かれ留まり住む、の意か）と説明されている。ここで問題となるのは「会津殿」であろう。墨書には「慶長六□□<sup>（辛八月三日）</sup>」と年紀があり、「会津殿」は時の会津の領主であった上杉景勝である



十二天図の旧軸木に見える墨書

可能性がまず考えられる。しかし、「会津殿」が岡村常玖が会津に招かれた時点での領主を指している可能性も否定できない。その場合、彼の年齢から判断して、「会津殿」を上杉景勝以前の領主である蒲生氏郷及び署名氏に比定する考え方も残されている。いずれにしても、ここでは明らかにする用意がなく、指摘するに止めたい。

第二期の修復は、「奥州会津若松赤井町表具屋 榎木善太夫利重」によるものである。「為父母作領寄進」とあり、表具屋の志による無償の修復であったと考えられる。

第三期の修復は、「会津若松槻木町表具屋谷川佐五左衛門利房」及びその子「民右衛門吉利」によって行われた。この期には、「十二天 拾式幅」、つまり全幅同時に修復を加えていることが分かる。また、十二天図とは別に、「大師御筆」をはじめとする恵日寺の什物が、更に一二幅修復されたことが、やはりこの軸木に記されている。これらはみな、「中将様」（会津藩主松平正容）の恵日寺来訪にあわせたものであった。第二期と第三期の間隔が約四〇年と比較的短いのもそのためと思われる。ちなみに第三期は、恵日寺中興とされる実質が住持を勤めた時期にあたる。彼の代には、右にあげたもの他にも、多くの什物の修復が行われた。

第四期は、「会津少将様 御表具役 秋山松四郎義□□」が修復を手がけた。この時もまた、十二天図を含め「三拾壹品」が修復されたと書かれている。「会津少将様」とは、会津藩主松平容敬のことである。

右の四期にわたる記録により、当初京都の表具師の手で行われていた十二天図の修復が、徐々に若松城下の表具師にゆだねられるようになり、更には会津藩お抱えの表具師によってもなされていたことが明らかとなった。また、修復の契機の一つに、藩主の来訪があったことも興味深い点である。いずれにしても、十二天図が幾たびもの修理を加えられ、恵日寺の什物として大切に伝えられてきたことと、修復の度に表具師達はその記録を丁寧に残してきたことは、注目すべきことである。

Q：貝塚の貝は化石ですか？

ある博物館の「縄文時代」の展示室で、貝塚から掘り出されたという貝殻が展示してあるのをみました。縄文人はこんな貝を食べていたのかと思い、感動しました。ところが、次に「大地の自然」の展示室に行ったら、ほとんど同じような貝殻に、「第四紀更新世」と書かれた札がつけられ、化石として展示してありました。貝塚の貝も化石ですか？

A：まずは質問にお答えします。貝塚の貝は化石ではありません。そして「大地の自然」展示室の貝は化石です。でもこれは、自然科学の立場からの判断です。では、自然科学ではなぜこんな区別をするのでしょうか？ そのわけをご説明しましょう。

## 貝塚の貝は化石？

化石とは、大ざっぱに言えば、地中から掘り出された過去の生物の記録のことです。ところで、過去の生物の記録を、科学的な意味で化石と呼ぶための一つの重要な基準があります。それは「人間の手が加わっていないこと」です。自然科学的には、人間の手が加わったものはすべて「人工物」と見なし、「自然界の記録」とは考えません。この点が、貝塚の貝を化石とは呼べない決定的な理由なのです。何しろ貝塚は、人間が食べた食料のゴミ捨て場ですから、れっきとした人工物です。

Q：では、どんなものを「化石」と呼んでいるのですか？  
A：科学的な意味での化石とは、「過去の地質時代に、地球上に生きていた生物の体や、体の痕跡が残されたもの、および生物が生活していた痕跡」と定義されています。

生物の体が残されたもの、とは、たとえば割れた貝殻の破片でも、完全な形の貝殻でもよいのです。でも、貝殻の中の肉質部が化石として残ることはありません。特別な例外を除けば、どんな化石でも、生きていたときの体全体が完全に残っていることはありません。また、貝殻そのものが残っていても、地層の中に貝殻の模様が押しつけられて残っていれば、それも化石です。これを印象化石といいます。次に、生物が生活していた痕跡とは、生物が掘った巣穴の跡や這った跡、足跡、そしてウンコなど、生物の体そのものではないけれども、生物が生きていたために残された痕跡のことで、生痕化石と呼ばれます。

更新世に生きていました。時代的には、化石と呼べる基準を満たしています。さて、ネアンデルタール人は、死者を悼み、遺体を埋葬する風習を持っていました。しかし、すべてのネアンデルタール人が埋葬してもらえたとはいえません。自然の状態に死に、そのまま土に埋もれてしまった人もいます。つまり自然死です。一方でネアンデルタール人は立派な人類の仲間です。そこで、埋葬は人工的な行為ですから、埋葬されたネアンデルタール人の人骨が見つかればそれは化石ではなく、自然死して土に埋もれた人の骨が発掘されれば、それは「化石人骨」です。なんだか変ですね。



Q&A  
相田 優  
自然担当

A：実はこの点については、科学的な意味のある基準はありません。極端に言えば、今日死んだ生物の遺骸も化石といえます。もつとも、ふつうは誰もそんな風には考えませんけれど。地質学では、現在から地球が誕生した四六億年前までをさかのぼり、地質時代を区分しています。その中でもっとも最近の一万年間を「完新世」と呼び、これを、地質時代上の「現在」とほぼ同じ意味にとらえています。そこで、たいへん便宜的な基準ですが、「現在」である完新世の生物遺骸は化石と呼ばず、完新世より一つ前の「更新世」より古いものを化石と呼ぶ、と説明されることが多いようです。

ところで、以上のことに基づくくと、ちょっと不思議なことが起こります。旧人であるネアンデルタール人は、



オキシジミガイ *Cyclina sinensis*  
左：第四紀更新世 塚原層 小高町塚原 (化石)  
右：縄文時代中期中頃～後期初頭 大畑貝塚Eトレンチ  
いわき市泉町下川 (貝塚の貝)

## トピックス

# エントランスホールに 二本松提灯祭りの太鼓台が復活

一月三日(木)、当館の催し物の一つとして、「二本松提灯祭り太鼓台組み立てとお囃子実演」が竹田町若連の皆さんによって行われました。屋台の部品の搬入から組み立て、お囃子の実演まで、本番さながらの熱気に包まれて行われました。

この祭りは、今から約三六〇年前、二本松藩の領主であった丹羽光重公が二本松神社を祭ったことに由来するもので、今では日本三大提灯祭りに数えられています。

今回再び組み立てられた太鼓台は、菅野孝一さんと菅野哲夫さんが、当館創立の昭和六一年に合わせて製作したものです。祭りで使われるものと同じで実に豪華絢爛に作られています。屋根の上のグシにも、屋根の下の破風や欄間にも鳳凰や飛龍が見事に彫り出されており、太鼓台を力強く躍動感のあるものとしています。部材は、基本的に黒く漆塗りにされ、彫りの部分は、漆の上に金箔を施すという手法で仕上げられています。また、この太鼓台を包んでいるのが三五〇にも及ぶ紅提灯です。屋根の上には天に向かって高々とすぎなりがそびえ立っています。夜空に打ち上げ花火のように光を放つのでしよう。

この屋台の特徴を竹田若連の一人で、彫刻師の橋本和成さんに伺うと、竹田町の太鼓台は、その土台の彫りに特徴があるといわれています。一般には、手がよく触れるところなので、金箔がはがれないようにと、奥深く彫り込むのですが、竹田町では平面的に彫っているので、使い込むにしたがって、表面の金箔が剥げ落ち、黒漆がさらに磨き上げられます。そしてその奥に、ちらちらと黄金色が輝きを放つ。そこがたまらなくいいとおっしゃっていました。

ご来館の際には、太鼓台に施された数々の彫刻を近くでご覧になってみてください。



木彫刻師橋本和成さんと太鼓台土台の彫り物



提灯を取り付ける作業



金箔に輝く太鼓台の彫り物

春の企画展 予告

## 「馬と人との年代記」 くろニククル 大陸から日本、そして福島へ

- ①人が馬に乗るようになったのはいつ？
  - ②卑弥呼の時代に馬はいた？
  - ③昔の馬の大きさはサラブレッドとポニー、どちらに近い？
  - ④絵馬を神社に納めるのはなぜ？
- いくつお分かりになったでしょうか？

この展覧会では、まず、地中から掘り出された考古資料によって、馬がいつ、どのようにして日本へ入り、そして利用されたのかを探ります。さらに、今も色濃く残るふくしまの馬文化を、おもしろや工芸品、映像などを通して、実感していただきたいと思えます。

遠く西アジアや中国の馬具、黄金色に輝く古墳時代の馬飾り、精巧な馬の造形、ユーモラスな表情のハニワ馬、そして郷土に根づく勇壮な野馬追など、遙か紀元前から現在にいたるまで、大陸から日本、そして福島へ、疾駆する馬の年代記(クロニクル)をお楽しみください。



白河市筑内横穴の金銅馬具と復原品  
(所蔵・写真提供 まほろん) ※子供さんは乗れます！

■春の企画展《馬と人との年代記》くろニククル  
日(土)から六月一日(日)まで  
くろニククル  
大陸から日本、そして福島へは、平成一八年四月二二

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「集めて楽しい・身近なもの」  
—館蔵コレクション展—  
会期 一月二十九日(火)から  
二〇〇六年三月二十六日(日)まで



講演・講座

※は要申込

◎冬の収蔵資料品展展示解説会

「江戸時代の地図・絵図」

—会津領二十三万石を歩く—

講師 学芸員 高橋 充  
日時 一月二二日(土)午後一時半～二時半

◎体験講座

※「わらでうりをつくろう」

講師 技術伝承者 鈴木幸雄さん  
日時 二月一日(土・祝)

※「万華鏡をつくろう」  
午前一〇時～午後三時

講師 展示解説員 柏木由佳野ほか  
日時 三月一日(土)午後一時半～三時半

◎民俗学講座

※「会津の流し雛①」(視聴覚室)

講師 学芸員 佐々木長生・川延安直  
日時 二月二五日(土)午後一時半～三時

※「会津の流し雛②」(実技)

(実習室・市内湯川天神橋付近)  
講師 学芸員 佐々木長生・川延安直  
日時 三月四日(土)午後一時半～四時

◎ふくしまを知る講座

シリーズ 県博収蔵コレクション(全4回)

第一回「江戸時代の絵図・昭和の絵はがき」

講師 学芸員 高橋 充・阿部綾子  
日時 二月五日(日)午後一時半～三時

第二回「弥生時代の石器・土器」

講師 学芸員 藤原妃敏  
日時 二月二二日(日)午後一時半～三時

第三回「仕事着・玩具・わら人形」

講師 学芸員 佐々木長生・榎 陽介  
日時 二月一九日(日)午後一時半～三時

第四回「鉱物・植物化石」

講師 自然分野学芸員  
日時 二月二六日(日)午後一時半～三時

◎はくぶつかんで遊ぼう!

「だんごさし」

講師 展示解説員  
日時 一月二五日(日)

午前九時半～午後四時半

「ひな人形づくり」

講師 展示解説員  
日時 二月一八日(土)

午前九時半～午後四時半

\*所要時間は、それぞれ二〇分程度です。

木曜の広場

講師 館長 赤坂 憲雄  
学芸員 佐々木長生  
場所 講堂 入場無料

◎第一回

「会津の初市と市神祭り」

日時 一月二九日(木)午後一時半～三時

◎第二回

「鶴ヶ城周辺の稲荷信仰」

日時 二月一六日(木)午後一時半～三時



会藩年中行事図のうち四月木流観音馬乗【部分】  
湯浅松石筆 当館蔵

◎第二回

「馬と信仰」

日時 三月二六日(木)午後一時半～三時

実演

場所 体験学習室

◎「昔語り」

語り部 山田登志美さん  
日時 三月二六日(日)午後一時半～三時

やさしい展示解説会

\*展示解説員による常設展の案内です。

\*毎週土曜日、日曜日の午前一〇時半と午後二時から四五分程度行います。

\*なお、他の行事と重なる場合は開催いたしません。

\*その他、行事等の詳細に関しましては、  
月行事予定表やホームページをご覧ください。

一～三月の休館日

年末年始 一月二八日(水)～一月四日(水)

一月 一〇日(火)・二六日(月)・二三日(月)

三〇日(月)

二月 六日(月)・一三日(月)・二〇日(月)

二七日(月)

三月 六日(月)・一三日(月)・二〇日(月)

二三日(水)・二七日(月)

\*小・中学生、高校生は常設展を無料で  
ご覧いただけます。